

氏 名	やま ぞえ ひろ し 山 添 博 史
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 388 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	ロシア帝国のアムール川流域進出における極東情勢と欧州秩序、 1847-1860年
論文調査委員	(主 査) 教 授 中 西 輝 政 教 授 木 村 崇 教 授 西 井 正 弘

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は19世紀中葉のロシア外交の展開を、極東に対する政策とヨーロッパに対する政策の両面から考察し、その全体像の中から1850年代のロシア帝国のアムール川流域進出について考察しようとするものである。

論文は全体で6章から成っており、第1章序論においては、論文の狙いと構成の紹介、先行研究の検討、主な使用史料についての説明に加えて、本論文の焦点となるテーマである19世紀半ばの露清関係の前史として、17世紀半ばから19世紀始めまでの露清関係史の概観が扱われている。その中で、とくに先行研究と史料論においては、本論文のテーマが帝政期、ソ連時代、ソ連崩壊後の各時期で問題の扱われ方や史料へのアクセスが大きな変動をくり返してきた事情に触れている。たとえば19世紀後半から20世紀初めの帝政期やソ連時代初期に比して、その後の時代には逆に研究環境が悪化したことや、ソ連崩壊後の一定時期には比較的史料公開が進んだにもかかわらず近年再び制限が復活しつつあるような趨勢などが触れられている。露清関係の前史については、吉田金一『近代露清関係史』などの主として二次史料に依拠した概論になっている。ここでは論文の主要テーマに関わる問題として、近代西欧的な国際関係観とは異なる中露関係に独特の国際関係の構図が簡潔に描き出されている。

第2章「クリミア戦争後のロシア外交の転換：欧州秩序の再編」以下が本論文の主要部分となるが、まず第2章では、当該時期のヨーロッパ国際政治におけるロシアの外交的位置づけを詳細に考察している。19世紀前半のいわゆるウィーン体制において、ロシア外交が正統主義と現状維持に軸足を置いたアレクサンドル一世およびニコライ一世の対ヨーロッパ政策が、クリミア戦争における敗戦を契機として、いわゆる「リアルポリティーク」に傾斜する外相ゴルチャコフらの現状変更の外交へと転換していった全体像が、同時代の主要な欧州外交の 이슈に即して検討されている。まず第2章においてこうした対欧州関係の転換という底流を確認することで、次に連なる第3～5章の本論文の主要設定テーマにつなげる構成となっている。

第3章「ムラヴィヨフの対中対日外交：アムール川流域と樺太」では、19世紀中葉から本格化する東シベリア及び極東進出を主導したニコライ・ニコラエヴィッチ・ムラヴィヨフのアジア政策を概観する。そこでは第2章を受けて、ムラヴィヨフによるアジアでの積極的な膨張志向が、ヨーロッパにおけるロシア外交の慎重な現状維持政策と対照をなし、次いでクリミア敗戦後の転換を先取りするような意味があったことを明らかにしている。さらにムラヴィヨフの対応を通じて、欧亜の間でロシア外交の対応にいかなる連関があるのか、という点からの考察もなされている。またムラヴィヨフの対中アプローチと対日アプローチの比較にも関心が向けられている。とくに、アムール川流域が問題となる対中外交と、樺太をめぐる対日交渉への取組みという、ロシアの国益構造との関連で比較が進められている。

第4章は、露清間の天津条約締結(1858年)に至るエプフィミー・ヴァシリエヴィッチ・ブチャーチンの交渉を中心に、ロシア外交の極東へのアプローチという問題が一層深く考察されている。そこでは、ペテルブルグにおける国家的な次元での意図、東シベリアの地域レベルの見地、そして中国現地における交渉担当としてのブチャーチンの態度という、三つのレ

ベルに見られる政策意図と対応の整合と不整合それぞれの条件が、事態に即するかたちで分析されている。加えて、プチャーチンの対清外交が、アロー号戦争で清国と対決関係に入った英仏との間の「仲介外交」のもった複雑な意味の解明がなされている。すなわち、英仏との間でロシアは対ヨーロッパ外交で見せた「列国協調」の立場を表面上守りつつ、清国に対しては西欧列強とは異なる非西欧的な国際関係としての中露関係をアピールすることで、天津条約締結というロシアにとっての「仲介外交」の果実を得たことが詳細に描き出されている。またこの章では、プチャーチンがイギリス全権エルギンとの間で展開した、英露間のきわめて微妙な「協調」外交が浮き彫りにされている。さらに、プチャーチンの随員として交渉に赴いたオステン・サケンの日記に基づいて、露清交渉の展開がヴィヴィッドに描かれている。

第5章においては、露清間で北京条約締結（1860年）をもたらしたニコライ・パブローヴィッチ・イグナチェフの交渉過程を中心に叙述がなされる。ここでも、第3章および第4章で採られた「ペテルブルグ」、「東シベリア」、「現地中国」という三つのレベルからの分析が踏襲されている。また、イグナチェフの積極的な「仲介外交」の現地におけるイニシアティブの強さが、前章のプチャーチン外交とのコントラストとして描き出されている。すなわち、再燃したアロー号戦争という緊迫した背景の中で、イグナチェフのより強力な姿勢からの対清交渉と、英仏とくにエルギンとの間に潜在的に鋭い緊張をもたらしながら、あくまで清国と英仏の間に立って「仲介」外交を押し進めるという基本路線とが追求されてゆく過程が詳しく叙述されている。そして、ウスリー川以東いわゆる沿海州のロシア領有という大きな果実をもたらした、この「仲介」外交の意義が明らかにされる。加えて、イグナチェフの対清交渉には、つねに中央アジアあるいは新疆方面への考慮がその外交にも大きな位置を占めていたことも実証的に明らかにされている。

最後に第6章結論において、前章までの考察を踏まえてロシア外交の対ヨーロッパ政策と極東政策の対照と連関という問題が考察される。またそこからさらに敷衍して、ロシア外交の対中国アプローチに示された非西欧的な国際関係観が取り上げられ、他の西欧列強とは異なる、ロシアに特有の中国観や極東観がロシアの外交政策に及ぼした影響に言及がなされている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、近代国際政治史研究において長年にわたり研究史上のギャップの一つであった帝政ロシアの極東進出をめぐる外交過程と、その国際政治的背景の解明に果敢に挑戦しようとする試みといえる。当該期のロシア外交における対ヨーロッパ政策と極東進出政策の具体的な関連を、実際の外交過程に即して考察し、その関わりのパターンを探ろうとする研究は内外ともに、従来乏しかった。そこには、極東史や極東問題は極東・アジア研究という独自の分野で行われ、他方ロシアの対欧州関係は欧州外交史のテーマとして、それぞれ全く別個に扱われる傾向が、わが国だけでなくロシア、欧米においても強くあったという事情が指摘される。さらにこれに加えて、ロシア外交は19世紀半ばのクリミア戦争の敗北を契機として、その政策上のアプローチだけでなく思想的・歴史的性格をも転換させることになるが、このロシア外交の大きな背景の変化が極東進出にいかなる意味をもったのか、という点も従来、ロシアにおける研究も含め十分に検証されてこなかったと言ってよい。本論文は、こうした研究上のギャップに対して、これまで余り取り上げられなかった一次史料や先行研究の中から丹念に事実や個別的知見を拾い出し、それらを総合して、自らの問題意識に沿って組み立ててゆくことで、現時点で望みうる十分な成果を挙げていると評価できる。

さらに本論文において使用されている史料・資料については、従来の帝政ロシア外交の研究において必ずしも十分に、あるいは全く利用されてこなかった重要な一次史料が多数含まれている。たとえば天津条約（1858年）の締結交渉においてプチャーチンの随員として関与したオステン・サケンの日記を発掘し、その持つ意義を提起したことは、本論文が行った重要な研究上の貢献といえる。その日記は史料的価値が高く、単にこれまで明らかでなかった露清交渉の具体的な展開状況を明らかにしているだけでなく、本論文の中心テーマとかかわる当該期のロシア外交が持っていた、他の西欧列強とは異なる中国への文化的・歴史的アプローチの特異さをも浮かび上がらせるものとなっている。

ロシア外交史研究における文書館での史料・資料の利用は、つねにロシア特有の難しさを含むものであるが、本論文はソ連崩壊後の情報公開の流れを見据えてその利用法を考え、その上で可能な限り広く渉獵を試みていると評価できる。すなわち、ロシア連邦国立文書館、ロシア帝国外交資料館あるいはロシア連邦古文書文書館などでの広範な当該史料の渉獵・検索

が行われており、上述のオステン・サケン日記など本論文における重要な知見を支える史料発掘につながったと言える。さらに、本論文は当該時期のロシア極東政策に対してイギリス外交が及ぼす影響の大きさに鑑み、イギリス外務省文書など他国の公文書館の史料も広範に渉猟している。ただし、本論文が第2章において扱っているロシアの対ヨーロッパ外交を叙述している部分においては、一次史料よりも、むしろ近年の欧米研究者の手になる二次文献により多く依存していることは、極東を扱う第3、4、5章との間で依拠史料のレベルの整合性という点で、ギャップを残すものと言わねばならない。ただ、この点は依然として手書き文書が主流であった当時のロシアの外交実務の状況を考えれば、欧亜の両面にわたる大量の一次史料を隈なく渉猟することは通常、大変困難なところであり、また、本論文の主要テーマが「極東」にある以上、このことは重大な欠陥を成すものではない。

しかし、結論（第6章）については、それまでの各章がいわばナラティブ（事実叙述的）な性格が強いのであった以上、それらを締めくくる結論としてより分析的な叙述をもっと広範に展開すべきであったと思われる。ただこの点は、歴史研究における社会科学的手法をどこまで取り入れるか、という大きな方法論的問題にも関わるところがあり、この点は申請者にとって今後の一つの課題として留意さるべきものと言えるだろう。

他方、本論文が全編を通じ、その叙述を通して解明している、ロシア外交における対ヨーロッパと対極東という「二つの顔」が深く文明論的な要因に根ざしていたことが全体として明瞭に浮かび上がっており、この点は評価できる。たとえば、とくに第4章、第5章で中心的に扱われているロシア外交による、清国と英仏など西欧列強との間の「仲介外交」が、単にロシアの国家利害に基づくものであっただけでなく、17世紀以来のいわゆる「200年の友好」という、非西欧的な世界観や文明意識にも依拠するものであったことが明らかにされている。このような第4～5章の展開は、序論において概観されている前史としての露清関係史とうまくつながっていると評価できる。しかも、それでいて、当該時期も含めて露清間に一貫して伏在していた、互いの根深い「他者意識」が、現実の外交過程に即して具体的に描き出されている点も注目される。

なお、本論文の主要テーマではないが、この点で清国外交あるいは冊封外交の世界観ないし「中華的世界観」に発する対外交渉におけるアプローチの理解においても、本論文は中国側の一次史料や文献に即しつつ、適切な視点を有していると認めることができる。

以上を総合し、本論文は、史料レベルの不整合点や叙述・分析的な考察などの点で部分的・方法論的な課題を残しながらも、欧亜にまたがるロシア外交の展開を、「西欧近代的」、「中華的」、「ロシア世界的」な文明空間を通観する視座から、その間の外交・国際政治的な意味づけを成功裡に行っているものと見なすことができる。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成20年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。